

を帯びていることと、ジプシーの目がトラの目のように燃えていることが、両者の共通性を表している。水のイメージには正負両方の意味があり、洪水が浄化の象徴として正の意味を持つ一方で、降り続いた雨は「悲しみ」の象徴として負の意味を持っている。イベットが助かったのは初春であり、大自然の中で新しい生命が芽吹く時イベットも再生するのである。

★★★★★の洋書(2)

不運？ 不器用？ 滑稽？

～読者を引き込むルイス・サッকারの本～

法学部

小坂 敦子

ルイス・サッカー (Louis Sachar) はアメリカでは子どもたちに大人気の作家の一人で、私も楽しく20冊ぐらい読みました。今回は、その中から私にとっての「とっておき」を中心に紹介します。

ルイス・サッカーの本は、9～12歳向けのものが多いので、洋書を読み始めて間もない人にも、自分の好みに合った本が選べれば¹、楽しく読破するのにそれほどハードルは高くはないと思います。また、大きめの活字で80ページ程度の短編から、細かい活字で200ページを超すようなものまで、長さもいろいろありますので、英語を読むことにどの程度慣れているのかという点からも、幅をもって選択できます。

子どもたちに人気のある理由を私なりに考えてみました。まずはユーモアたっぷり、で、軽妙洒脱。ちょっとありえないというか極端だと思える場面もあります。登場人物は必死なのですが、一生懸命さの裏返しで、傍から見ると滑稽に見えたりする、そんな視点を味わえるときもあります。

ルイス・サッカーの本をアマゾンで検索するとき、*Johnny's in the Basement*² という本のカスタマー・レビューの中に「SACHAR 得意の“ち

よっと不運な男の子” が恋をし、友情を深めながら少しずつ成長していく姿がよく描かれています」³ という文を見つけました。

「ちょっと不運な男の子」、と読んで、「そうか、そういう見方もあるのだな」と思いました。私自身は、「不運」というよりは、「不器用な」男の子を描くのがとても上手だと感じていたからです。

ルイス・サッカーの著作の中で、私が好きな本には共通点があります。それは、「不運」にせよ「不器用」にせよ、決して理想的とは思えない状況の中で、決して完璧でない主人公が、弱さを持ちながらも健気に生きていこうとすることです。その道は、順風満帆ではないので、私はすっかり応援モードになって、ドキドキ・ハラハラしながら引き込まれてしまいます。そして、あっと言う間に最後のページが近づいてきて、「もう少し読んでいたいなあ」と思いつつ、最後の20～30ページは思わずゆっくり味わって読んでしまいます。特に次の3冊がそうでした。

*Super Fast, Out of Control!*⁴

*Small Steps*⁵

*Dogs Don't Tell Jokes*⁶

この3冊について、以下、少し説明します。

Super Fast, Out of Control!

この作品は Marvin Redpost というシリーズ⁷の中の7冊目です。自分にはできそうもないことに、不本意にも直面させられていく主人公の気持の描き方が上手いと思いました。“It felt good to make his own decision.” (73ページ) とか、“Only one person cared whether or not Marvin Redpost rode his bike down Suicide Hill. That person was Marvin Redpost.” (79ページ) など、人生を語っている？ ような台詞もいくつかありました。

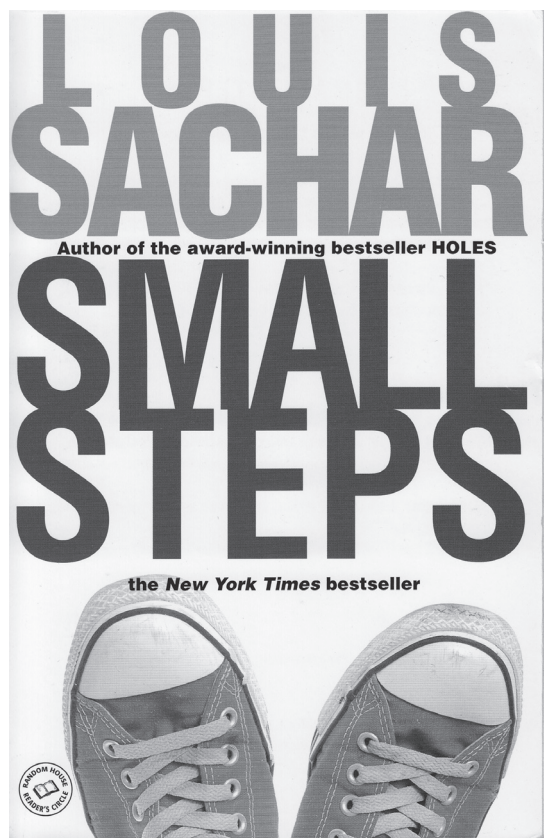
このシリーズは1冊が短く (80ページ程度) 活字も大きいので、英語の苦手な人にも手にとりやすいと思いますし、「洋書にチャレンジする」足慣らし？ にもよいと思います。

Small Steps

ルイス・サッカーと言うと、ニューベリー賞を受賞した *Holes*⁸ を思い浮かべる人が多いと思います。この本は、*Holes* の登場人物の一人 Armpit (「脇の下」という意味) というあだ名で呼ばれて

いた少年を中心に話が進みます。彼は *Holes* では「グリーン・レイク少年矯正キャンプ」にいました。*Small Steps* では、矯正キャンプの後の人生を、一步步前に向かって歩いていこうとしています。なかなか簡単にはいきません。*Holes* は賞もと、映画にもなり⁹、よく知られている本ですが、私はこの *Small Steps* の方が数倍気に入っています。*Small Steps* は話の進展にドキドキで、途中で深呼吸をしないと読み続けられないぐらいでした。

Holes は細かい活字で200ページ以上ありますので、あまり英語を読んでいない人には、いきなり *Holes* を読むのは少しいへんかもしれません。アマゾン等でレビューを読み、なんとなくでも *Holes* について少し知識をいれてから *Small Steps* を読むとよいかもしれません。



Dogs Don't Tell Jokes

ここに登場する Gary 君も健気で不器用だと思います。本人は stand-up comedian（お笑いタレント、ジョークを立て続けに語ってみんなを笑わすような人）の才能があると信じています。しかし、

なかなか周囲には認めてもらえません。

活字は大きめで、200ページぐらいの本です。本のあちこちらに出てくる英語のジョークの中には、ちょっと理解しにくいものがあるかもしれません。

なお、*Someday Angeline*¹⁰でも Gary 君は登場します。

上記の3冊以外にも強く印象に残っているものとしては、以下の2冊があります。

*There's a Boy in the Girl's Bathroom*¹¹

児童文学の賞も受賞している本です。問題児と見られている Bradley 君と学校のカウンセラー Carla さんとの関わり、そして、友人の Jeff 君との関係の変化が、とても上手く描かれています。

*The Cardturner*¹²

今まで紹介してきた本とは少し異なり、この本の舞台はブリッジの世界です。ブリッジはカードゲームの一種ですが、ブリッジの知識がなくても楽しめるような工夫がされています。亡くなった人が活躍する不思議な本でもあります。

読書の秋、勉強に疲れたときはルイス・サッカーの洋書で楽しく気分転換はいかがでしょう？

〈注〉

1 「自分の好みに合った本が選べれば」と下線までひいたのは、私自身、ルイス・サッカーの中でも、楽しめなくて挫折した本もあるからです。具体的には *Sideways Arithmetic from Wayside School* (Scholastic より1989年に出版) と *More Sideways Arithmetic from Wayside School* (Scholastic より1994年に出版) です。この2冊は算数の本です。数学の好きな高校生に見せると、「簡単だった」というようなことを言っていました。算数・数学ともに苦手だった私には解けない問題もけっこう多くて、途中でいやになってしまいました。逆に数学が得意な人にはいいかもしれません。

ちなみにこの2冊が舞台となっているのは Wayside School という常軌を逸した不思議な学校です。ルイス・サッカーはこの学校について次の3冊の本を書いています。

- (1) *Sideways Stories from Wayside School* は Follett Pub. Co. より1978年に出版。イラストは Dennis Hockerman。
- (2) *Wayside School Is Falling Down* は1989年に Lothrop, Lee

& Shepard Books より出版、イラストは Joel Schick。

- (3) *Wayside School Gets a Little Stranger* は Morrow Junior Books より1995年に出版、イラストは Joel Schick。

この学校については、好き嫌いが分かれるかもしれませんが、ルイスという著者と同じファーストネームの「校庭係の教師」も登場します。このルイスからは、子どもたちへの暖かい眼差しがしっかり感じられます。

- 2 Avon Books より1981年に出版
- 3 このカスタマー・レビューは以下に載っていました。
http://www.amazon.co.jp/gp/product/0380834510/ref=oss_product
- 4 Random House より2000年に出版。イラストは Amy Wummer。
- 5 Delacorte Press より2006年に出版。
- 6 Knopf より1991年に出版。
- 7 このシリーズは現在のところ8冊が出版されています。主人公の名前は Marvin Redpost。1冊ずつ話は完結します。このシリーズでは、私は3冊目 *Is He a Girl?* (Random House より1993年に出版、イラストは Barbara Sullivan) と6冊目 *Class President* (Random House より1999年に出版、イラストは Amy Wummer) がかなり好きです。
- 8 Dell Laurel-Leaf Books より2001年に出版。
- 9 2004年にブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテインメントより「穴/Holes」というDVDが発売。
- 10 Avon Books より1983年に出版。イラストは Barbara Samuels。
- 11 Knopf より1987年に出版。
- 12 Delacorte Press より2010年に出版。

白い雪と黄色い雲

経営学部
矢田 博士

木末北山煙冉冉

木末 北山 煙は冉冉たり

草根南澗水泠泠

草根 南澗 水は泠泠たり

繰成白雪桑重緑

白雪を繰り成せば 桑は重ねて緑に

割尽黄雲稻正青

黄雲を割り尽くせば 稲は正に青し

北宋・王安石の「木末」と題する七言絶句である。王安石は、神宗の時に宰相に抜擢され、「新法」と呼ばれる急進的な政治改革を敢行したことで知られるが、晩年は政治の一線から退き、江寧（江蘇省南京市）に隠居した。江寧府城の北の郊外には鍾山という名の山が横たわる。本詩は、江寧隠居後の作で、鍾山の麓の初夏の田園風景を描く。「冉冉」は、徐々に移りゆくさま。「泠泠」は、水が清らかなさま。

—《北に目をやると、山を包み込んでいた霧がしだいに薄れゆき、木々の梢が姿を現しはじめた。南に目をやると、谷川の両岸に草が生い茂り、その草の根のあたりを清らかな水がさらさらと流れている。「白い雪」を紡ぎおえたかと思えば、桑は再び緑の葉を茂らせ、「黄色い雲」を刈り尽したかと思えば、稲はまさに青々とその葉を伸ばす。》—

後半二句に見える「白雪」と「黄雲」を、ここではあえて文字通り「白い雪」と「黄色い雲」と訳したが、「繰」「割」という動詞が用いられていることから、それぞれ「白い繭から紡ぎ出される生糸」と「黄金色に穂を实らせた一面の麦畑」の比喩であることが察せられよう。⁽¹⁾ 農家の女は、繭から生糸を紡ぐ作業を終えたかと思えば、引き続き蚕を育てるための桑摘みの作業に移る。一方、農家の男は、麦の収穫を終えたかと思えば、秋の収穫に向けて稲の成長を見守る。後半の二句は、このような初夏の一連の農事を詠ったもので、「白い繭から紡ぎ出される生糸」に「緑に茂る桑の葉」、「黄金色に実った麦の穂」に「青々と伸びる稲の葉」と、初夏の田園の風景が、あたかも一幅の絵を見ているかのように、色鮮やかに目に浮かぶであろう。ちなみに、穀物は一般に、秋に実りの季節を迎えるが、麦は旧暦の初夏四月に穂を实らせる。よって、旧暦の四月（新暦では五月）頃を、「麦にとつての実りの秋」という意味で、「麦秋」と呼ぶ。

ところで、本詩の後半二句に見える「白雪」「黄雲」の比喩表現は、後世の詩評家の注目するところ